Raffiné Journal vol.04

# 懐かしさの正体

Raffiné

**ふいに胸が震えるときがある。**

まだ起きてもいない未来なのに、
どこかで触れたことがあるような懐かしさが
静かにこちらを見つめている。

前にも、この感覚を味わったことがある。

何かが始まる前触れのような、
小さな光が胸の奥で点いたようなあの瞬間。

けれど当時は、それは現実には結びつかなかった。

だからこそ、今この懐かしい感覚を前にすると、
期待を抱くことが少し怖くなる。

「また間違えるのでは」「勘違いかもしれない」
そんな声が、未来の気配にそっと影を落とす。

けれど、恐れと懐かしさが同時に来るとき、
それは“過去”ではなく、“未来”のほうが
こちらに近づいているのかもしれない。

ある瞬間、その感覚は突然やって来る。

言葉にできないのに、
はっきりと“何か”が宿っている気がする。

理由も根拠もないのに、心がそわそわと揺れる。

その揺れが、ただの不安なのか、未来の予兆なのか、
判断できないまま立ち尽くす。

過去の記憶が足を引っ張る。

あのときも同じような光を感じたけれど、
形にならなかった。

だから今回は、手放すようにして
慎重に距離をとってしまう。

けれど、本当に似ているのは“結果”ではなく、
“始まりの震え”のほうなのかもしれない。

あの頃は受け取れなかったものに、
いまの私は少しだけ手が届く気がした。

期待を抑えようとする心と、
その奥でかすかに震えている“確かな気配”が
静かに向き合っている。

懐かしさのようでいて、どこにも属さないこの感覚は、
過去の影でも、未来への願望でもない。

むしろ、いまの自分が
かつて見落としてきた “感受性の深さ” に
そっと触れているだけなのかもしれない。

怖さの中に微細な光を見つけるとき、
人はただ、自分の内側がよく見えるようになる。

この揺れは予兆ではなく、
私が変わった証として、静かに息づいている。

懐かしさは、変わった自分が見せる
かすかな兆し ——

R.

Raffiné Journal — vol.04

著者：美学思想家 古川玲奈
発行：Raffiné
2026